

所縁を渉る

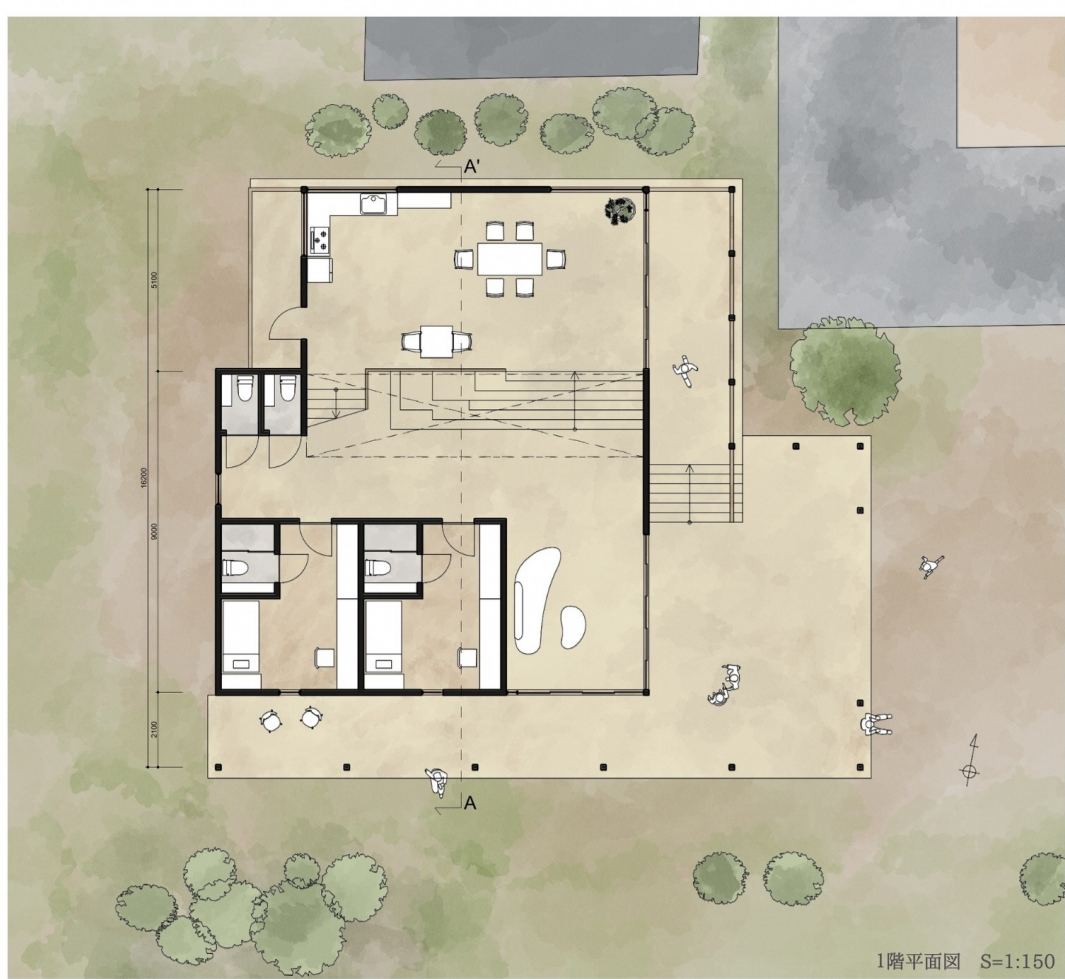


1. SUMMARY

本建築は、公園に隣接する学生向けシェアハウスでありながら、地域に開かれた多世代交流のコミュニティ拠点である。日本の伝統的な「縁側」の思想を現代に再解釈し、建物と公園の境界、学生と地域住民との境界をなくす広大な半屋外の床空間を創出する。木材の温かさと、光や風を取り込む開放的なデザインにより、世代や立場を超えた人々が自然に集い、新たな「所縁」を育む。本建築が持つ床空間が、人と人との繋がりを深め、温かいコミュニティを形成する。

2. SITE

敷地は、京都の歴史と文化が息づく左京区、一乗寺・北白川エリアに位置する。多くの大学が点在するこの地域は、学生たちの活気と、古くから住む地域住民の穏やかな暮らしが共存する独特の文化を育んできた。神社仏閣が多く集中する静謐な環境と、学生街としての賑わいが、白川通を境に隣接する。この地の特性を最大限に活かし、公園に位置する建築を地域に開かれた存在として捉えた。



1階平面図 S=1:150

3. CONCEPT

京都市が抱える人口減少、若年世代の流出、コミュニティの希薄化という課題に対し、私たちは「所縁を渉る」という建築コンセプトを提示する。これは、人々と地域、そして世代間の見えない壁を越え、深い「縁（えにし）」を築いていくための建築的アプローチである。

「所縁(ゆかり)」という言葉には、その場所や人との繋がりという意味が込められている。学生と地域住民、若者と高齢者といった、普段は交わることのない人々が、この場所で特別な「所縁」を育むことを目指す。これは、社会を支える人材である若年層が、地域に愛着を持ち、定住するきっかけとなることを意図している。「渉る」という言葉には、川や境界を越えるように、人々が積極的に関わり合い、繋がりを深めていくという意志が込められている。縁側という空間が、世代や立場といった見えない壁を越え、人々が互いの関係を「涉っていく」ための架け橋となることを期待する。

本建築の核となるのは、日本の伝統的な縁側を現代に再解釈した、建物と公園の境界を曖昧にする広大な半屋外の床空間である。従来の建築では、居住空間と公共空間は明確に分離されていた。私たちのデザインは、この境界を溶かすことから始める。

4. DAIGRAM

(1) 境界の再定義

公園に対して床空間がせり出すことで、外と内がシームレスにつながる空間を創出した。これは単に建物の開放性を高めるだけでなく、地域住民が気軽に立ち寄れる心理的な障壁を取り除くことを意図している。

外の活気ある公共空間から、半屋外の床空間を経て、徐々に静けさを増す内部の個人的空間へと、空間の性格が滑らかに変化していく。



← 公共 → 居住 →



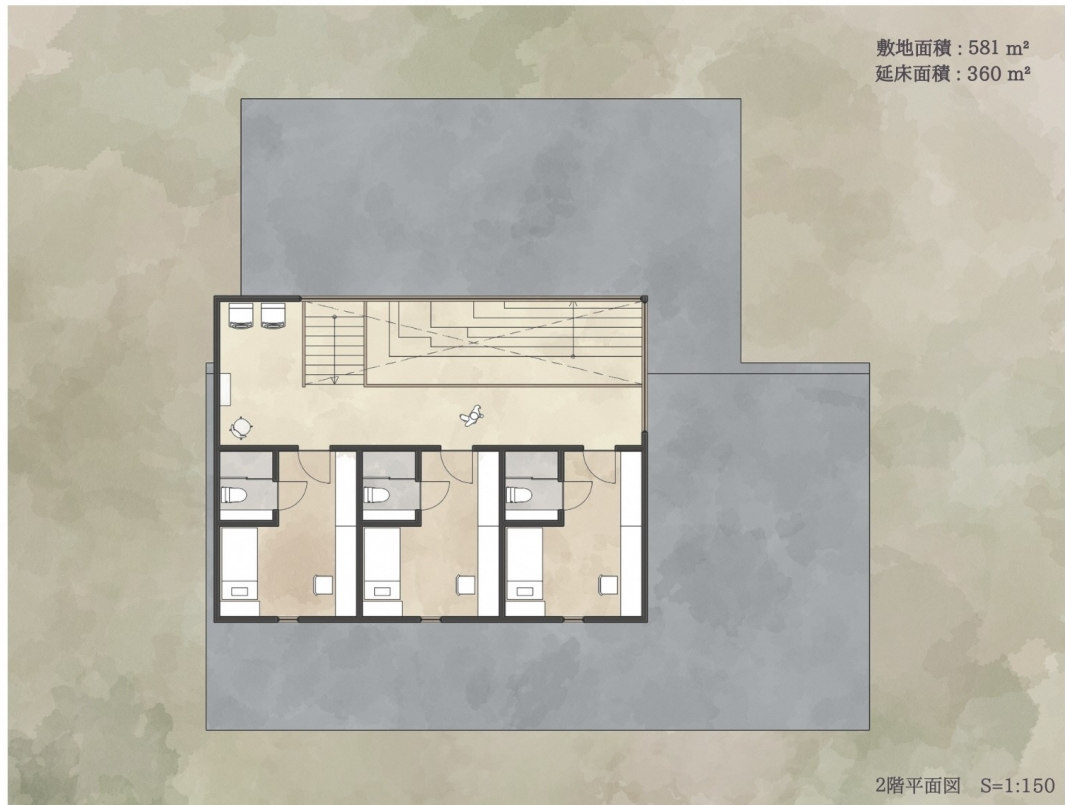
(2) 立体的な縁側の創出

この建築の中心は、公園と自然につながる広大な木の床空間である。スキップフロアの採用によって空間を立体的に連続させ、建物全体を一体的なコミュニティとして機能させた。学生、高齢者、子供たちがそれぞれのフロアで活動しながらも、互いの気配を感じ、自然に視線が交わる。これにより、居住者である学生が地域社会と深く関わる機会が生まれ、卒業後も京都に留まりたいと願う「故郷」が形成される。

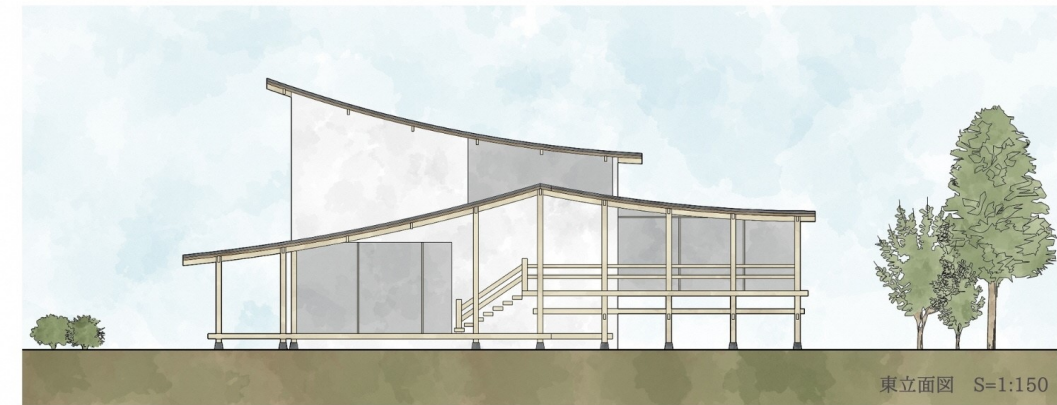
また、各フロアは徐々に個人的な領域へと移行する動線を持ち、共有空間と個室がゆるやかに分かれている。プライバシーを確保しながらも、住人同士や地域との緩やかな繋がりを維持できるデザインである。個室には、十分な静けさと快適性を確保するため、トイレとシャワーを完備した。

(3) 木の文化で織りなす

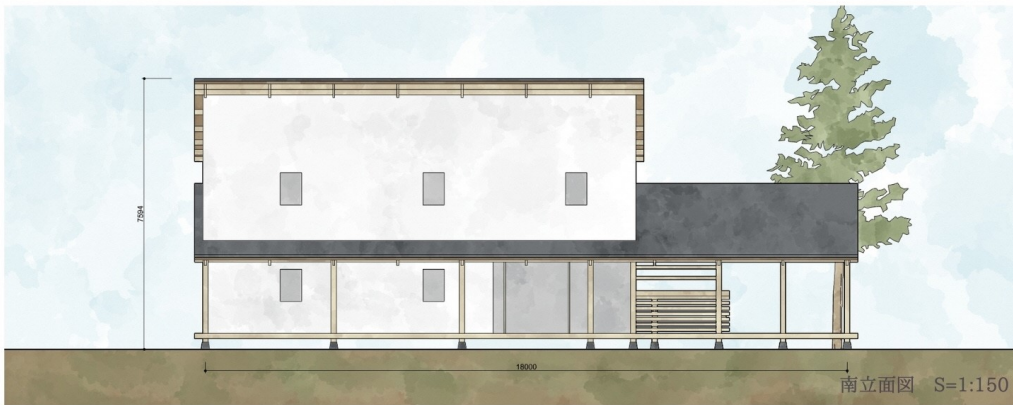
木材を活かした屋外空間は、清水寺の舞台に代表されるように、京都の歴史と文化に深く根ざしている。広大な縁側空間はもちろん、スキップフロアの土台に京都府内産のスギをふんだんに使用し、木材ならではの格好と風合いを活かした。この建築は、地域の素材を使うことで、地域との新たな「所縁」を結ぶだけでなく、木材という文化を現代に継承する役割も担っている。



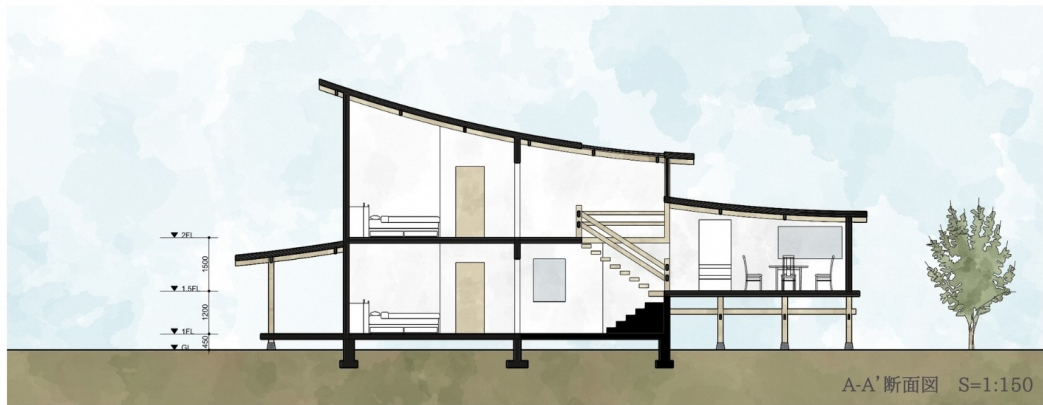
2階平面図 S=1:150



東立面図 S=1:150



南立面図 S=1:150



A-A' 断面図 S=1:150